

Title	エミール・バンヴェニストの「ことばにおける主体性」： ある一文を巡って
Sub Title	«La subjectivité dans le langage» chez Émile Benveniste : autour d'une phrase
Author	小野, 文(Ono, Aya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.37 (2022.), p.67- 98
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20220630-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エミール・バンヴェニストの 「ことばにおける主体性」 ——ある一文を巡って——

小 野 文

0. はじめに

エミール・バンヴェニスト（1902-1976）の言語学が二十世紀人文科学にもたらした衝撃の一つに、「ことばと主体の結びつき」に関する思想がある。この結びつきは「ことばにおける主体性について」という1958年の論考⁽¹⁾で明白な形で提示され、以降、バンヴェニスト言語学のその他のキーワードである「ディスクール」「物語」「発話行為」などと共に、構造主義を乗り越える契機を生みだしたものと捉えられてきた。バンヴェニストが用いた表現：

- (I) C'est dans et par le langage que l'homme se constitue comme *sujet*⁽²⁾.

(1) Benveniste 1958. 以降、「主体性論文」と呼ぶ。

(2) *PLGI*, p. 259 (邦訳244頁)。以下、バンヴェニストの論考の引用で、*Problèmes de linguistique générale* (Benveniste 1966) の第1巻に所収されているものは、*PLGI*, p.x と引用元を記す。また、同書の邦訳『一般言語学の諸問題』（みすず書房、1983年）を始め、その他の欧文文献で邦訳を参照させて頂いたものは頁数を記したが、訳語統一と論旨の運びの関係上、用語や表現を変更しているところがある。また本論考の筆者が引用箇所に強調を施した場合は、「(強調は引用者)」と注に示すが、原著者がイタリック強調等を行っている場合には特記しない。

ひとが主体として自らを作り上げるのは、ことばのなかで、またそれによってである。

は、その後、頻繁に引用される定式になったとも言える。

ところで未だに謎が残るのが、「ことばにおける主体性」(フランス語では « la subjectivité dans le langage ») がバンヴェニストの言語思想のなかでどのように育まれてきたのか、という点である。フランス国立図書館草稿部に残された膨大なバンヴェニストの草稿資料には、この1958年の論考の下書きと目されるノート、メモ類は一切見当たらない。また1930年代後半から少なくとも1950年にかけて、バンヴェニストはソシュールの「体系としてのラング」の解明を彼自身の言語学の目的としており、「話す主体」という主題は避けられているかのようにも見える⁽³⁾。手掛かりがほとんどないなか、研究者の間で一般的に理解されているのは、「1947年に動詞人称に関する考察⁽⁴⁾を発表したバンヴェニストが、ヤコブソンの動詞カテゴリーについての発表を1950年ごろ耳にし、1956年に人称代名詞に関する論文⁽⁵⁾を、そしてその2年後に主体性に関する論文をものした」という見方である。しかしこれには幾つかの留保が必要だろう。

1947年の論考で、バンヴェニストは「わたし」について次のように述べている。

(II) « Je » désigne celui qui parle et implique en même temps un

(3) 例外的に「話す主体」という用語が現れるのは、1939年の「言語記号の性質」である。これはソシュール『一般言語学講義』における恣意性概念に関する、よく知られた論考であるが、ここでは「話す主体 *sujet parlant*」というソシュール用語が多用されている。また1950年の論考「名詞文」では、「話し手の主体性 *la subjectivité du locuteur*」という表現が見当たすが、これも例外的な現れと言えよう。

(4) Benveniste 1947.

(5) Benveniste 1956a. 以降、「代名詞論文」とも呼ぶ。

énoncé sur le compte de « je » : disant « je », je ne puis ne pas parler de moi⁽⁶⁾.

「わたし」は話している人を示すと同時に、「わたし」に関する言表である。わたしと言うとき、わたしはわたしのことを話さざるを得ないのである。

この自己言及という特性をもつ人称を、バンヴェニストは「主体的人称」と名づけ、「あなた（非＝主体的人称）」、また「非＝人称」と対立させていくのであるが、ここでバンヴェニストは実際には「主体」あるいはその主体を可能とする「（ことばにおける）主体性」の問題には入っていない。この論考でバンヴェニストが「主語（sujet）と人称（personne）を混同してはいけない」と述べている通り、また別の論考のなかで、動詞のなかの人称・数・態という三つの参照項が一緒になって「sujet」の姿勢の場を定義する⁽⁷⁾、とされているように、ここに言う「sujet」、あるいは「subjectivité」は、あくまで言語のなかに装置として組み込まれているものであり、日本語で言い表すなら「主語」、あるいは「言語（langue）体系に組み込まれた主体性の発現装置」とでもいうべきものを扱っている。またこの論考で、動詞人称を対立図式で捉える見方も、いまだ構造主義的な言語観に支えられていると言ってよい。「ことば（langage）における主体性」で現れる「主体」や「主体性」と全く別物ではないにしろ、差異があるように見受けられるのである。

またヤコブソンのシフター論の影響についても、疑問が残る。確かにバンヴェニストの一連の論考のなかでも「代名詞の性質」（1956）は「ことばにおける主体性について」（1958）と直結しており、その限りでは50年代初期にヤコブソンの講演内容をどこかで見知ったバンヴェニストが⁽⁸⁾、

(6) *PLGI*, p. 228 (206頁)。

(7) Benveniste 1950, *PLGI*, p. 174 (172頁)。

(8) 決定的な証拠はないが、例えば先頃公開されたバンヴェニストとヤコブソン

それに刺激を受けて「代名詞」、ひいては「主体とことばの関係」の考察を導いていったと言えなくはない。しかしヤコブソンのシフター論が動詞カテゴリーの分析から引き出される図式的な自己言及の理解に留まっているのに対し、バンヴェニストの主体性の理解は、「わたし」の自己言及の問題だけではなく、「ことば」と話し手がとりもつ関係を、より複雑なものとして描いているように見受けられる。

本論考では、(I)の一文を練り上げられた定義文として捉え、この表現面に注目することで、「ことばにおける主体性」の現れ方について考察を加えようとする試みである。じつにこの一文は、一語一語立ち止まって検討すべき文であり、また主体性論文全体を凝縮している文でもある。この論文において、バンヴェニストはいわゆる主体性の根拠を「ことば」に見ているのだが、「ことば」と「人間」のあいだは、*« dans et par »*という見慣れない前置詞群によって関係付けられている。既存の前置詞、既存の論理では表せない関係を、バンヴェニストはどうかして言い表そうとしているようである。

以下の段落では、(I)を五つのパートに分け、「ことば」と「主体」の関係が、どのような思索と表現から生まれているのか、検討してみたい。

1. 強調構文——*C'est dans et par le langage que l'homme se constitue comme sujet.*

この一文は、強調構文と呼ばれる形を取っており、強調されているのは、*« dans et par le langage »*（ことばのなかで、またことばによって）という状況補語の部分である。言い換えれば、文の構成要素としては補足的な

の間の書簡 (Laplantine et als. 2021) においては、バンヴェニストがヤコブソンに宛てて、「あなたが話してくれた、動詞の構造に関する論考は、パリ言語学会の紀要で発表したら」と誘っており (1951/1/4 付け書簡)、「転換子と動詞のカテゴリー」に関する有名なヤコブソンの考察 (結局は1957年に発表されることになる) を、部分的ではありながらバンヴェニストはヤコブソンから見聞きしていたと推測できる。

部分が、ここでは強調されている。この強調箇所についてはすぐ後で見ることにして、もう少しこの構文に注目してみたい。というのも、ほぼ同じような意味内容を別の形で強調を行っている文章が「代名詞の性質」(1956a)に見いだせるからである。

(III) [J]e ne peut être identifié **que** par l'instance de discours qui le contient et par là seulement⁽⁹⁾.

「わたし」が同定されるのは、それを包有するディスクールの審級によって、そしてそれによってのみである。

(I) の文章の2年前に書かれているこの (III) の文章のなかでは、強調されているのは「人称代名詞「わたし」を包括するディスクールの審級によって」という部分であり、「seulement」(～のみ)という副詞も加えて強調する念の入れようである。つまり (I) も (III) も、強調なしでは成立しないような、そのような文章なのだと理解できる。また (I) の文章で強調されているのは「ことばのなかで、そしてそれによって」であったが、(III) の文章の強調は、「それを包有するディスクールの審級によって、そしてそれによって」である。強調されている意味内容が似ていることにも注意を促しておきたい。

2. ～のなかで、またそれによって——C'est dans et par le langage que l'homme se constitue comme *sujet*.

2.1. 初出

強調されている部分の重要な要素である « dans et par », この前置詞表現に関してはすでに検討を加えたことがあるが⁽¹⁰⁾、今回はそれを部分的になぞりながら、さらに先へと考察を進めてみたい。まずは « dans et

(9) *PLGI*, p. 252 (235頁／太字強調は引用者)。

(10) Ono 2018.

par » の思想について考える前に、この表現がどこから来ているのか、探ることから始めてみよう。

とりわけバンヴェニスト的な表現と言われる « dans et par » だが、その使用が始まるのは1956年以降に限られる。表現の初出は「フロイトにおけることばの機能に関する注記」⁽¹¹⁾である。

(IV) [...] c'est que les événements empiriques n'ont de réalité pour l'analyste que **dans et par** le « discours » qui leur confère l'authenticité de l'expérience, sans égard à leur réalité historique, et même (faut-il dire : surtout) si le discours élude, transpose ou invente la biographie que le sujet se donne⁽¹²⁾.

それというのも、経験的出来事は、分析医にとって、ディスクールのなかで、またそれによってしか、現実味を持たないからであり、このディスクールが出来事に経験の真正さを付与するのである。このとき、身上に関わる事実性は問題にならず、もしも（とりわけと言うべきか）患者がみずからに帰している伝記を、ディスクールがごまかし、すり替え、作りだしている場合もそうである。

同じ論文には、(IV) のヴァリエーションとも言える表現も現れている。こちらはバンヴェニストの書いたもののなかでは一回きりの表現である。

(V) En ce sens, les configurations de la parole sont chaque fois uniques, bien qu'elles se réalisent à l'intérieur et par l'intermédiaire du langage. Il y a donc antinomie chez le sujet entre le discours et la langue⁽¹³⁾.

(11) Benveniste 1956b. 以降「フロイト論文」とも呼ぶ。

(12) Benveniste 1956b, *PLGI*, p. 77 (85頁／太字強調は引用者)。ちなみにここにも強調構文が使われており、« dans et par le « discours » » が強調されている。

このような意味で、言葉の結構は、それがことばの内部で、またことばを媒介にして実現するにも拘わらず、毎回唯一のものである。

それゆえ患者においてはディスクールと言語の間に二律背反がある。

このヴァリエーションからも分かるように、前置詞句 « dans et par » は、「内部にあること」そして「媒介であること」を意味していると思われる。ここでも « dans et par » に続く名詞は「ことば」であり、言葉（パロール）の結構が実現するのは、ことば（ランゲージュ）の内部で、そしてそれを媒介にして、と表現されている。

ちなみに同じ年に発表されている「代名詞の性質」(Benveniste 1956a) では、« dans et par » は現れないが、すでに強調構文のところでもた引用箇所 (III) では、「わたし」は、それを包有する話の審級によって、そしてそれによってしか、同定されえない」という表現が現れており、同じような意味内容を持つものとして注目しておいてよいだろう。

この前置詞句が1956年に突然現れ、以後、頻繁に用いられるようになるには、何らかの契機がはたらいていると考えられる。そもそも « dans et par » という表現は、どのようにバンヴェニストの言語思想に入り込んできたのだろうか。以下では三つの可能性を挙げてみたい。

2.2. « dans et par » の由来

1) ラカンの精神分析

まず挙げられるのは、« dans et par » の初出論考「フロイト論文」が扱っている精神分析、とくにラカンのそれである。バンヴェニストはラカンの依頼でこの論考をしたためた際、ラカンから幾つかの論文を渡されていたようである。「ローマ講演」と呼ばれるラカンの「精神分析におけるディスクールとことばの機能と領野」に関しては、フロイト論文のなかで

(13) Benveniste 1956b, *PLGI*, p. 78 (86頁)。

長い引用も行っている¹⁴⁾。

この「ローマ講演」ではなく、「精神分析における攻撃性」(1948)というラカンの発表には、重要な部分で« dans et par »が現れる。

On peut dire que l'action psychanalytique se développe dans et par la communication verbale, c'est-à-dire dans une saisie dialectique du sens. Elle suppose donc un sujet qui se manifeste comme tel à l'intention d'un autre¹⁵⁾.

精神分析的行いとは、ことばのコミュニケーションのなかで、またことばのコミュニケーションによって、すなわち意味の弁証学的理解のなかで、発展するということができる。精神分析的行為はしたがって、一他者の意図に応じて自らそれとして出現する主体を想定している。

ここでは主体の現れという重要な場面において、「ことばのコミュニケー

(14) 少し時系列を整理しておくことが必要だろう。「ローマ講演」が語られたのは1953年9月、バンヴェニストがラカンの雑誌『精神分析』にフロイト論文(そのなかで「ローマ講演」を引用)を載せるのは1956年だが、すでに1956年1月にラカンが自分のセミナーのなかで「去年のバンヴェニストの論文」に触れていることを鑑みると、1955年には、すでにバンヴェニストの論文は完成され、ラカンの手元に届けられていたと見てよい。「ローマ講演」もバンヴェニストのフロイト論文も、ともにラカンの雑誌『精神分析』(*La Psychanalyse*)の創刊号に載せられている。ちなみにこの創刊号は、バンヴェニストだけでなく、ハイデッガー、J.イポリット、D.ラガージュなどが執筆者として名を連ねており、彼らは全てラカンの依頼により論考を寄せたのである。それゆえバンヴェニストはラカンから依頼を受けた際、「ローマ講演」や「精神分析における攻撃性」のような、すでにラカンの手元にあったり、活字化されていた発表論文を参考文献として渡されていたのだと考えられる。バンヴェニスト自身はおそらく一度もセミナーに参加していない。ちなみにこの創刊号にハイデッガーは「ロゴス」というタイトルで論文を載せており、『存在と時間』(ドイツ語版)の読者でもあったバンヴェニストは、必ず目を通したことと思われる。

(15) Lacan 1948, repris dans Lacan 1966, p. 368 (太字強調は引用者)。

ションのなかで、またそれによって (dans et par la communication verbale)」という表現が使われていることを強調しておきたい。そしてこの「dans et par」が、ある迂回、すなわち「他者の意図に応じて」という促しの動きを導くものだということにも留意したい。

ラカンにおいては、「dans et par」という前置詞表現があらわす動きは、主体から発しつつ、他者の意図という促しに応じる形で主体を出現に至らす、そのような動きである。1948年の段階では、ラカンは大文字の他者 (Autre)、小文字の他者 (autre) という使い分けを行っておらず⁽¹⁶⁾、ここで言及されている一他者が暗に「ことば」を指しているのかは不明瞭である。しかしながらここで引用したラカンの表現が、バンヴェニストのそれに近いことは明らかで、言語学者がラカンの書き物から影響を受けた可能性が高いことを示している。

2) コペンハーゲン学派

言語の中の関係性に関心を寄せていたコペンハーゲン学派は、「格」や「前置詞」の研究を進め、ソシユール主義的立場から、言語内部の複雑な対立構造を記述することに熱心であった。イェルムスレウの『格のカテゴリー』(1939)、ブレンダルの『前置詞論』(1950)は、言語要素間関係性を示す「格」や「前置詞」を扱ったものとして、40年代から50年代の前半を通してバンヴェニストの関心を引き続けていた。

バンヴェニストは構造主義の始まりに関して「言語学における《構造》」という論考を1962年に著しているが、そのなかでコペンハーゲン学派の『アクタ・リングイステイカ』創刊号 (1939)⁽¹⁷⁾の冒頭の、ブレンダ

(16) 精神分析の歴史家ルディネスコによれば、1955年5月30日の「盗まれた手紙」に関するセミナーのなかで、大文字の A と小文字の a の関係が理論化されたという。Cf. Roudinesco 1993, p. 352.

(17) バンヴェニストはこの学術誌の創刊号に、ソシユールの恣意性を扱った有名な論考「言語記号の性質」を載せている。彼とコペンハーゲン学派の繋がりは早くから結ばれ、特にイェルムスレウとは戦時中もお互いの生活や研究に関して書簡を交わす間柄だった。

ルの声明を引いている。

- (VI) Dans une déclaration liminaire écrite en français, le linguiste danois Viggo Brøndal justifiait l'orientation de la revue par l'importance que la « structure » avait acquise en linguistique. À ce propos, il se référait à la définition du mot structure chez Lalande, « pour désigner, par opposition à une simple combinaison d'éléments, un tout formé de phénomènes solidaires, tels que chacun dépend des autres et ne peut être ce qu'il est que **dans et par** sa relation avec eux »⁽¹⁸⁾.

フランス語で書かれたその巻頭の声明の中で、デンマークの言語学者ヴィッゴ・ブレンダルは、この雑誌の意図するところを、「構造」が言語学において獲得した重要性によって根拠づけている。これについて彼は「諸要素の単なる結合とは違って、各要素が他音要素に依存し、各要素が他の要素との関係においてのみ、また他の要素との関係によってのみそれ自身でありうる」といった、連帯関係をもつ諸現象によって形成された一つの全体を指すために「ラランドに見られる構造なる語の定義を参照している。

上の引用では分かりにくいだが、ここで「dans et par」という表現を用いているのはA. ラランドで、当時は誰もが参照していた『哲学語彙集』⁽¹⁹⁾の「構造」の項をブレンダルが引用し、それを再びバンヴェニストが引用している。それではブレンダル、あるいはイェルムスレウ達は「dans et par」を用いなかったかということ、そうではない。関係性の記述に長けていた彼らにとっても、この表現はお気に入りの一つだったようだ。少なくともイェルムスレウは、すでに1928年の著作『一般言語学の原理』におい

(18) Benveniste 1962, *PLGI*, p. 96 (103頁/太字強調は引用者)。

(19) Lalande 1926.

て用いている。

Sont termes les catégories qui, au contraire, ne se justifient et ne se révèlent que **dans et par** la phrase : telles catégories sont le sujet, le prédicat, l'objet, etc⁽²⁰⁾.

項となるのは、主語、述語、目的語等のカテゴリーであるが、これらは逆に、文のなかで、また文によってしか根拠をもたず、また現れ出てこない。

Non seulement les éléments syntaxiques n'existent que dans le système virtuel de la langue, mais, ce qui est plus, ils n'existent que dans certaines séries d'éléments morphologiques. Ils n'existent que **dans et par** la « phrase », dans le sens élargi de ce terme⁽²¹⁾.

統辞論的要素は言語の潜在的体系のなかにしか存在しないだけでなく、さらに言うなら、それらはある種の形態論的要素群のなかにしか存在しない。それらは、広い意味での「文」のなかで、またそれによってしか、存在しない。

興味深いことに、上記の2箇所において「dans et par」につながるのは両方とも「phrase」（文）であり、また両方とも「～でしかない」という形で強調されている。つまり、どちらも「文のなかで、また文によってしか」ない、という意味内容になっている。ここでイエルクスレウが問題にしているのは、統辞論的な役割を持つカテゴリーであり、それは、「文」のなかでしか、また「文」によってしか存在しない、ということである。この文章に、「わたし」のような人称代名詞がディスクールのなかでしか存在しない、と主張するバンヴェニストの表現は、漸近線を描くように近

(20) Hjelmslev 1928, p. 33 (太字強調は引用者)。

(21) *ibid.*, p. 51 (太字強調は引用者)。

づいている。

3) 哲学者たち——サルトルを中心に

バンヴェニストは若い頃から文学のみならず哲学に関心を寄せ、言語研究の傍ら哲学思想書を紐解いていたことが分かっている。とくに「ことばにおける主体性」という思想の背景には、哲学からの影響が見え隠れしている。

パリ国立図書館草稿館のバンヴェニスト文庫には、大量の草稿ノートやメモ、付箋が箱に収まった形で残されているが、そのうち n°35の箱には、とりわけ哲学書からの引用が目立つ。同じ種類の罫線ノートや紙片を使ったメモ書きが残されているため、おそらくは同じ時期に取られたものだろうと思われるが、それらの「哲学的」メモに混ざって、「能動態／中動態」、完了形と汎過去に関するメモが存在するところをみると、おそらく40年代後半から50年代初めのもの考えてもよいのではないか。まさしくバンヴェニストの「主体性」概念が成熟する時期と重なっているのである。

多くの引用は、『哲学研究』(*Recherches Philosophiques*)という哲学雑誌からなされている。これは A. コイレ、H.-Ch. プエッシュ、A. スペイエが創刊、編集にあたり、第1巻(1931-1932)から第6巻(1936-1937)まで年1回刊行された学術誌で、論考執筆者のなかには、よく知られた哲学者・思想家(M. ハイデッガー、R. アロン、G. マルセル、H. コルバン、G. バシュラール、E. レヴィナス、J.-P. サルトル等々)や、バンヴェニストに近い学者(H.-J. ポス、E. ピション、G. デュメジル等)がいた。以下では« dans et par »との関連で、J.-P. サルトルに注目したい。

『一般言語学の諸問題』第1巻のなかにサルトルの名は一回だけ出ており、それは『状況 I』(*Situations, I*, 1947)からの引用である。しかしこれだけでなく、バンヴェニストの草稿メモには、サルトルの『イマジネール』(*L'Imaginaire*, 1940)、『自己の超克』(*La transcendance de l'ego*, 1937)からの複数の引用が残っている。サルトルの著作は同時代の知識人には避けて通れない書だったに違いないが、こうしたメモが「自己」や

「意識」に関する箇所を引用しているため、バンヴェニストにとってもサルトルの書いたものは、「ことば」と「主体」の関係を考えるうえでとりわけ参考にしたものの一つだったのではないかと疑われるのである。『自己の超克』の初出は上述の『哲学研究』誌のなかでであり、長大な論考のなかから、バンヴェニストは幾つかの箇所を抜き書き、メモしている。

「主体性」との関連において私たちの興味を引くのは、『自己の超克』からの次のような引用である。

Le Je c'est l'Ego comme unité des actions. Le moi c'est l'Ego comme unité des États et des qualités. La distinction qu'on établit entre chez deux aspects d'une même réalité nous paraît simplement fonctionnelle, pour ne pas dire grammaticale²².

「わたしJe」とは、諸行動の統一体としての「自我Ego」である。「自己moi」とは、諸状態と諸性質の統一体としての「自我Ego」である。一つの同じ現実の二つの側面のあいだに立てられる区別は、私たちに文法的とまでは言わなくとも、たんに機能上のもののように思われる。

それに続いて「dans et par」の表現は次の頁に現れる。バンヴェニストが当該部分の引用をしているわけではないが、「自我の構成」と名づけられたセクションに、言語学者は必ず目を通したことだろう。

Or ma haine m'apparaît en même temps que mon expérience de répulsion. Mais elle apparaît *à travers* cette expérience. Elle se donne précisément comme ne se limitant pas à cette expérience. Elle se donne, *dans* et *par* chaque mouvement de dégout, de

²² Sartre 1937, p. 99 (邦訳47頁)。

répulsion et de colère, mais en même temps elle *n'est* aucun d'eux, elle échappe à chacun en affirmant sa permanence²³.

ところで、わたしの憎しみは、わたしの嫌悪の経験と同時に現れ出る。しかしその憎しみが現れ出るのは、その経験を通じてである。それはまさしく、この経験だけに局限されないものとして、与えられる。その憎しみが与えられるのは、嫌悪や嫌悪、怒りといった各運動のなかで、またそれによってではあるが、しかし同時に、憎しみはそれらの運動のどれでもなく、自らの恒久性を明示しつつそれらのどれからも逃れるのである。

ここで若いサルトルは、前置詞の « à travers » « dans » « par » を強調して使っている。それらの前置詞が関係づけようとしているのは、「憎しみ」と、「嫌悪（等の）経験」である。その後でセクションの終わりには、次のような文章が現れる。

La haine apparaît à travers elle [la répulsion] comme ce dont elle émane. Nous reconnaissons volontiers que le rapport de la haine à l'« Erlebnis » particulier de répulsion n'est pas logique. C'est un lien magique, assurément²⁴.

憎しみは、嫌悪を通じて、そこから嫌悪の出るところとして、現れる。憎しみと嫌悪という特別な経験とのあいだの関係が、論理的でないことはいさぎよく認めよう。それは確かに、魔術的な結びつきである。

この箇所のサルトルの記述は、« dans et par » が現れているわけではないが、同じような表現がとられている点に注目したい。「嫌悪を通じて、

²³ *ibid.*, p. 101 (邦訳51頁)

²⁴ *ibid.*, p. 103.

そこから嫌悪の出るところとして」というのは、憎しみから嫌悪が流れ来ている（「流出」という概念をサルトルは用いている）のに、同時に憎しみは嫌悪を通じて現れでる、ということで、これは「～によって、またそのなかで」の動きと似たような関係性を述べていると言えよう。そしてここでサルトルはそれを「魔術的な結びつき」と呼んでいることにも注意を向けておきたい。

最後にもう一つ、サルトルのよく知られた別の著作、『文学とは何か』（Sartre 1948）から « dans et par » の該当箇所を引用してみたい。

Les poètes sont des hommes qui refusent d'*utiliser* le langage. Or, comme c'est **dans et par** le langage conçu comme une certaine espèce d'instrument que s'opère la recherche de la vérité, il ne faut pas s'imaginer qu'ils visent à discerner le vrai ni à l'exposer⁽²⁵⁾.

詩人たちは、ことばを使うのを拒否するひとたちである。ところで、真実の探求に作用するのは、道具の一種として捉えられるところのことばのなかで、またそれによってなので、彼らが真実を見極めたり露わにしたりすることを目指しているとは思わないほうがいい。

ここで真実の探求が行われるのは「ことばのなかで、ことばによって」と記されている。ちなみに主体性論文の冒頭では「ことば≠道具」観が示されており、上のサルトルの「詩人」の見方とは別の意見が示されているのではあるが、「dans et par」を軸として鏡映反転になっているようで興味深い。

2.3. « dans et par » の思想

ここまで « dans et par » という表現がどこからバンヴェニストの書き

(25) Sartre 1948, p. 17（太字強調は引用者）。

物のなかに入ってきたのか、その可能性を探ってみたが、ここからは « dans et par » がバンヴェニストの思想のなかでどのような意味を持つのかについて考えてみたい。

すでにジェラルド・デッソンがこの「とりわけバンヴェニスト的な」表現に関して次のような指摘を行っている。

『一般言語学の諸問題』において, « dans et par » は関係の思想である。[...] ことばと主体性のあいだを « dans et par » という弁証学的関係付けによって結ぶこの「関係」の表現は, ことばの哲学的・言語学的見方を作りなす。

一方では, 意識を包み込む (dans) モノとしてのことばという, 主体の理想主義的観念が, 動作主, 活動としてのことば (par) という観点によって正されている。またもう一方では, 人をことばの外側に置く, ことばの道具観が疑問に付されており, そこには個人化過程はことばの外ではなく, ことばのなかにおいて行われるのだという思想がある²⁶⁾。

前置詞はそもそも関係性を示す言語要素であるので, 「関係の思想」を表すということには異議はない。上のデッソンの指摘をさらに明確化させるなら, « dans et par » という表現には, 「一つの見方をもう一つの見方が疑問視し, 揺らがせる」というような, 二つの矛盾した見方, 矛盾した関係性が現れているということである。

さらに次のようなことが言えるだろう。まずはこの前置詞表現の新奇さである。「dans」だけでなく, « par » だけでもなく, « dans et par » と, 結びつけられているのは, 一つだけでは表せない関係性が問題になっているということだ。フランス語の一つの前置詞だけでは表明できない, 未だ

²⁶⁾ Dessons 2006, p. 137. デッソン自身はこの表現を「高等実践研究院の同僚であった A. コジューヴから来ている」とするが, その根拠を示していない。

存在しない関係を、「ことば」と「人」は主体化の際に取り持つのである。次に指摘したいのは、この« dans et par »は、「動き」や「時間性」を前提とすることである。もし「～のなかで」だけであれば、これは図式的・一面的に捉えられる関係である。しかし「～によって」と組み合わせざったとき、ここには動きが出てくると考えられる。最初に何かの内部にいたものが、それに巻き込まれる形でそこから作用を受ける、そのようなズレと動きが、« dans et par »からは感じられるのである。この動きについては、後に見る「中動態の思想」のセクションで、詳しく論じたい。

最後に、ことばと人の、この一筋縄ではいかない関係性について一つのヒントになるのは、コペンハーゲン学派の「融即律 *loi de participation*」かもしれない。ブレンダルやイエルクスレウたちは、ことばの論理の深層には単純な対立構造だけでは捉えきれないものがあると考え、それをレヴィ＝ブリュールの「前論理 *prélogique*」にならって「下部論理 *sublogique*」と名づけた。そしてそのなかでは、融即律と呼ばれる「A 対 A+nonA」のような複雑な対立が宿っているとしたのである。

バンヴェニストがコペンハーゲン学派に影響を受けて書いた「ラテン語における前置詞の下部論理体系」(1949)は、ラテン語内部の前置詞、とくに *pro* と対置させられるところの *prae* を取り上げて、新しい解釈を引きだそうとしている。

(VII) Quand *prae* marque une cause, cette cause n'est pas objectivement posée hors du sujet et rapportée à un facteur extérieur, mais elle réside dans un certain sentiment propre au sujet et, plus exactement, elle tient à un certain *degré* de sentiment⁽²⁷⁾.

prae が原因をしるすとき、この原因は主語の外に対象として置かれたり、外部の要因に帰されたりしているのではなく、原因は主語

(27) *PLGI*, p. 137.

に固有のある感情に宿っており、より正確には、感情のある度合いに起因している。

ここでバンヴェニストは、言語内部の体系における前置詞 *prae* の位置づけを試みようとしているが、その際に「主語の感情の度合い」というような、まるで動作主の強度の感情がにじみ出て、*prae* に浸食しているような表現を使っている。

« *dans et par* » という前置詞表現もまた、「主語／主体」と「ことば」のあいだの関係をとりもつために用いられており、分かりやすく論理的な関係ではない関係性が問題になっているのである。

3. ことば——*C'est dans et par le langage que l'homme se constitue comme sujet.*

さきほどの前置詞句 « *dans et par* » に導かれるのは、「ことば（ランガージュ）」である。バンヴェニストの用語法において、「*dans et par*」に導かれるものは、そのほとんどが「ことば」、「ディスクール」、「言語（ラング）」、「発話行為」である。

ここでバンヴェニストの用語法の曖昧さ・複雑さに言及しておいたほうがよいだろう。特に「主体性」をめぐる論考群においては、省察が理論化までに至っていないことから、用語間の定義がされておらず、「ことば（ランガージュ）」と「言語（ラング）」がしばしば入り乱れて用いられていることは、すでに指摘されてきた²⁸⁾。例えば代名詞論文や主体性論文が取り纏められたセクションは、論文集『一般言語学の諸問題』のなかで「言語のなかの人間」と題されているが、前書きではこのセクションに関して「ことばのなかの人間」と言及されている。これは単なるミスなのだろうか、それとも意図された不一致なのだろうか。

²⁸⁾ Cf. Lyons 1984.

とくにこの主体性論文では、「ことば le langage」と「言語（定冠詞のついた la langue）」「諸言語（複数形の les langues）」が複雑な模様を織りだしている。ふたつの用語の関係を示す文章を幾つか抜き出してみよう。

(VIII) Il [le langage] est marqué si profondément par l'expression de la subjectivité qu'on se demande si, autrement construit, il pourrait encore fonctionner et s'appeler langage. Nous parlons bien du langage, et non pas seulement de langues particulières. Mais les faits des langues particulières, qui s'accordent, témoignent pour le langage⁽²⁹⁾.

ことばは、主体性の表現があまりにも深く刻印されているため、かりに構成の仕方がそのようでなかったものとするれば、はなしてなおことばとして機能し、ことばと呼ばれうるかどうか疑わしいほどである。われわれが問題にしているのは、ことばであって、単に個々の言語のことをいっているのではない。しかし個々の言語の事実も、互いに一致して、ことばに有利な証言を提供している。

(IX) Le langage est ainsi organisé qu'il permet à chaque locuteur de s'appropriier la langue entière en se désignant comme je⁽³⁰⁾.

ことばは、めいめいの話し手が自らを指してわたしとして指し示すことによって、言語全体を専有することができるように組織されている。

最初の引用（VIII）において、le langage と les langues（particulières）が対置されている場合、その関係は比較的分かりやすい。le langage のほうは抽象的な「ことば一般」を指すのに対し、les langues particulières

(29) *PLGI*, p. 261 (245頁／太字強調は引用者)。

(30) *PLGI*, p. 262 (246頁／太字強調は引用者)。

のほうは数ある個別言語, つまりは具体的な諸言語を指すのである。これはソシユールにおける *la langue / les langues* の対立とほぼ同じように捉えうる。二つ目の引用 (IX) のように *le langage / la langue* が同文中に出てくる場合はどうだろうか。ここでもおそらく, *la langue* のほうは「言語一般」を指すというよりは, 単に具体的な「個別言語」, という意味で用いられており, *le langage* のほうは「ことば一般」, すなわち抽象化されたことばの活動を意味しているように思われる。

しかし, 例えば代名詞論文 (1956) のほうでは, 不可解な混在が認められる。ここでバンヴェニストは, 二つの「ことば」, あるいは二つの「言語」について述べる。

- (X) *L'habitude nous rend facilement insensibles à cette différence profonde entre le langage comme système de signes et le langage assumé comme exercice par l'individu*⁽³¹⁾.

我々は習慣のために, 記号の体系としてのことばと, 各個人の行使として果たされることばとのあいだのこの甚だしい差異に, 手もなく無感覚にされているのである。

- (XI) *Une analyse, même sommaire, des formes classées indistinctement comme pronominales, conduit donc à y reconnaître des classes de nature toute différente, et par suite, à distinguer entre la langue comme répertoire de signes et système de leurs combinaisons, d'une part, et, de l'autre, la langue comme activité manifestée dans des instances de discours qui sont caractérisées comme telles par des indices propres*⁽³²⁾.

代名詞として無差別に分類されている諸形態も, たとえ簡略にでも

(31) *PLGI*, p. 254 (238頁／太字強調は引用者)。

(32) *PLGI*, p. 257 (240頁／太字強調は引用者)。

分析してみれば、そこには全く違った性質の類が認められるのであって、その結果、一方には記号の目録とそれらの結合の体系としての言語と、他方にはディスクールの審級——それは固有の指標によってディスクールの審級として特性づけられている——において現れる活動としての言語とのあいだに区別を立てるべきことが知られるのである。

(X) (XI) という全く同じ論考内の二箇所において、le langage も la langue も等しく二重化・二分化しているのが分かる。60年代に入ってバンヴェニストが二つの「ことば le langage」の次元を先鋭にしていくとき、二つの次元の一方は「言語 la langue」、もう一方は「ディスクール」と呼ばれていくのであるが、50年代後半の段階では、バンヴェニストは「ことば」と「言語」とを対立化させたり、またそれぞれの輪郭をはっきりさせるための定義を行うことをしていない。

最後に付け加えるとすれば、主体性論文において「人間」を定義するものとして現れるのは、つねに「ことば」の方である。

(XII) C'est un homme parlant que nous trouvons dans le monde, un homme parlant à un autre homme, et le langage enseigne la définition même de l'homme³³.

この世界でわれわれが見いだすものは、話している人間、もう一人の人間に話している人間であり、ことばこそ人間の定義の仕方を教えるものなのである。

³³ *PLGI*, p. 259 (243頁)。

4. 自らを作り上げる——C'est dans et par le langage que
l'homme se constitue comme *sujet*.

4 番目に取り上げたいのは、代名動詞の「自らを作りなす」（原形は *se constituer*）である。主体性論文では、バンヴェニストは他にも似たような言い回しを用いて、「話し手が主体として自らをたてる」という思想を表現している。

(XIII) La « subjectivité » dont nous traitons ici est la capacité du locuteur à se poser comme « sujet »³⁴.

ここで我々があつかう「主体性」とは、話し手がみずからを「主体」として設定する能力のことである。

(XIV) Le langage n'est possible que parce que chaque locuteur se pose comme *sujet*, en renvoyant à lui-même comme *je* dans son discours³⁵.

ことばが可能となるのは、おのおのの話し手がみずからを主体として設定し、自分のディスクールのなかでわたしとして自ら自分自身を指し示すからでしかない。

このように話し手が「主体」となるには、devenir（英語の become に相当）でも être（be 動詞）の未来形でもなく、必ずと言っていいほど代名動詞が使われている。

それではバンヴェニストは *sujet* と代名動詞の関係をどう捉えているのだろうか。

1956年のフロイト論文では、代名動詞が繰り返し出てきて、それだけで

³⁴ *PLGI*, p. 259 (244頁／太字強調は引用者)。

³⁵ *PLGI*, p. 260 (244頁／太字強調は引用者)。

異様な感じを覚える箇所がある。そこはちょうど, *sujet* (ここでは「患者」の意) がディスクールを通して虚構の自分を作り上げていくことを描写する場面で、バンヴェニストがどのようにフロイトの精神分析をラカンの解釈を経ながら理解したかを如実にしめす部分ともなっている。少し長いが引用してみよう。

(XV) En première instance, nous rencontrons l'univers de la parole, qui est celui de la subjectivité. Tout au long des analyses freudiennes, on perçoit que le sujet se sert de la parole et du discours pour se « représenter » lui-même, tel qu'il veut se voir, tel qu'il appelle l'« autre » à le constater. Son discours est appel et recours, sollicitation parfois véhémement de l'autre à travers le discours où il se pose désespérément, recours souvent mensonger à l'autre pour s'individualiser. Du sel fait de l'allocution, celui qui parle de lui-même installe l'autre en soi et par là se saisit lui-même, se confronte, s'instaure tel qu'il s'aspire à être, et finalement s'historise en cette histoire incomplète ou falsifiée⁽³⁶⁾.

まず第一に、われわれは言葉（パロール）の世界に出会うが、これは主体性の世界である。フロイトの分析を通じて終始認められるのは、患者が言葉とディスクールを用いて自分自身を、自分が見たいと欲する姿、「相手」を促して認めさせようとする姿で「演出する」ことである。患者のディスクールは、呼びかけと訴えであって、彼が必死に自己を措定するディスクールを通して相手におこなう、ときとして激しい懇願であり、自分自身の目に自分の個性を目立たせるために相手におこなう、しばしば虚偽の訴えなのである。話しかけという事実だけからしても、自分自身のことを話す者は、自分

(36) *PLGI*, p. 77 (85-86頁／太字強調は引用者(邦文では太字強調は行っていない))。

の中に相手を定立し、そうすることによって自分を理解し、自分を対比し、自分がなりたいと熱望する姿に自分を作り上げ、果ては、この不完全なまたは変造された身の上話のなかに自己を物語化するのである。

ここで代名動詞を駆使して描写されるフロイト（ラカン）の精神分析、そこにおいては、患者が、相手に自分のことを語りながら、その自分を作り上げていくと言われている。

現代フランス語の文法において、代名動詞は4つの用法を持っている。1) 再帰的（行為の結果が自分に帰ってくる）；2) 相互的（原則として複数の主語がお互いに何かをおこなう）；3) 受動的（主にモノが主語で、意味は受動的）；4) 本質的（代名動詞でしか使われない）がそれぞれである。上の（XV）の箇所では、代名動詞は全て1)の再帰的用法となる。

私たちが問題にしている文章（I）においても、「se constitue」は再帰的用法と見なされる。ゆえに、「人は自らを作り上げる」と訳出できるのである。バンヴェニストは主体性論文、あるいは代名詞論文において、何度も同一化のことを話しており、また一般的にバンヴェニスト言語学においては、話し手である私（発話行為主体）は代名詞「わたし」（発話主語）と、ディスクールの審級のなかで一致するのだと受け止められている。（III）にあるように、「わたし」が同定されるのは、それを包有するディスクールの審級によって、そしてそれによってのみ」なのである。

しかし、「dans et par」を検討した前セクションでみたように、「ことばのなかで、またことばによって」人が自らを作りなすとき——つまりはひとが話すとき——ここにはどうしてもズレが生まれてきてしまうのではないか。それを示唆しているのは、バンヴェニストの同じフロイト論文の箇所である。

(XVI) Or la langue est structure socialisée, que la parole asservit à des fins individuelles et intersubjectives, lui ajoutant ainsi un dessin nouveau et strictement personnel. La langue est système commun à tous ; le discours est à la fois porteur d'un message et instrument d'action. En ce sens, les configurations de la parole sont chaque fois uniques, bien qu'elles se réalisent à l'intérieur et par l'intermédiaire du langage. Il y a donc antinomie chez le sujet entre le discours et la langue³⁷.

ところで言語は社会化された構造であって、言葉がこれを個人的かつ間主体的な目的に従わせ、こうして一つの新しい、厳密に一個人に属する輪郭をこれに付け加える。言語はすべての人に共通な体系であるが、ディスクールはメッセージの担い手であると同時に行為の道具でもある。この意味で、言葉の結構は、ことばのなかで、またことばを仲介として実現されるとはいえ、その度ごとに唯一のものである。したがって患者 (sujet) においては、ディスクールと言語の間に二律背反があるのである。

バンヴェニストは別の箇所でも、ランボアの « Je est un autre » 「私は一人の他者だ」を病理的な表現として、その自己同一性の崩壊を精神的な病に帰している。

(XVII) C'est pourquoi le « je est un autre » de Rimbaud fournit l'expression typique de ce qui est proprement l'« aliénation » mentale, où le moi est dépossédé de son identité constitutive³⁸.

そうだからこそ、ランボアの「私は一人の他者だ」は、自我がその構成的同一性を無くしてしまうという、まさに精神「錯乱」を示す

³⁷ *PLGI*, p. 78 (86頁)。

³⁸ *PLGI*, p. 230 (209頁)。

典型的表現なのである。

これらの引用箇所から分かることは、言語内の形式として存在し、発話の主語となる「わたし」と、その発話を発する行為主体との不一致は、バンヴェニストにとっては精神分析の対象となる「患者 *sujet* 」が陥る間隙であり、二律背反であるということだ。

しかしながら、もしかすると全ての再帰的代名動詞が表す「動き」は、ズレや不一致を含まざるを得ないのではないかと考えることもできる。バンヴェニストの中動態概念を考察した論考³⁹⁾で、私たちは彼の中動態のトポロジカルな定義から出発して、この態を動的に捉える提案をした。それに従うと、能動においても中動においても、主語はある動きの発信点となる、というのは共通している。しかし中動態において特殊なのは、この態において、過程〔事行〕は主語から発しつつ、主語を含み、主語に影響を与えていくという点である。ある意味、もともと主語の内部にいたものが（主語がその座になっていたものが）、主語を巻き込みつつ、主語に何らかの力を加えるような動きになるのが中動態である。ポジティブに見るならば、その動きは「内部に変化が生じる」「刺激を受ける」と表すことができるが、ネガティブに見るならば、「巣くわれる」「巻き込まれる」とも言える、そのような動きである。

« *se constitue* »において、代名動詞は再帰的に用いられていると言った。しかしこの再帰用法は、自らに戻る運動でありながら、最初の出発点と、戻ってきたときのそれには間隙がある。この間隙を含む運動が、代名動詞「自らを作りなす」が描く動きであり、「話す」という行為が生みだす軌跡なのである。

39) 小野 2022。

5. 主体として——C'est dans et par le langage que l'homme se constitue comme *sujet*.

私たちはようやく「主体として」という最後の表現にたどり着いた。接続詞 *comme* は、無冠詞名詞を伴うと、「～として」という意味になる。ここで人はことばのなかで、またそれによって自らを作りなし、そうしたうえで « *sujet* » としての資格を得る。

すでに指摘したことだが⁽⁴⁰⁾、日本語で「主体」と訳されるような « *sujet* » をバンヴェニストが表現として用いるとき、この「主体」が「主語」の位置にくることはない。言い換えれば、「主体が自らを作りなす」というような言明は、バンヴェニストの言語思想にはない。もともと「主体」が想定されているのではなく、「主体」はかならず「話す」という一連のプロセスの最後に事後的に現れ、しかも一瞬にして消え去るものである。ひとが話すことのなかで、またそれによってしか「主体」となりえないのであれば、その主体もまた刹那的なものにしかなりようがない。

先のセクションで、私たちはフロイト論文における代名動詞の使用と主体性論文におけるそれを比較して、それを同じ中動態の動きに結びつけたのであるが、フロイト論文における「患者 *sujet*」に関しても、これを主体性論文の「主体 *sujet*」と関連させて結びつけてみると、どのような « *sujet* » の姿が見えてくるだろうか。

フロイト論文に現れる « *sujet* » は、熱心に「わたしがたり」をおこなう。「こう見られたい」と思う自分の姿を作り出し、自分の身の上を語るのである。その身の上話は、ことばによって語られている限り、客観的な事実とは相容れない虚構作品であり、また社会的な言語（ラング）を用いて自分のことを話（ディスクール）として語るかぎり、そこにある不一致を生きざるを得ないのがフロイト論文の « *sujet* » である。

(40) Ono 2018.

フロイト論文の結びに、バンヴェニストは「精神分析のことば」と「普通のことば」を区別している。そのような意味では、フロイト論文の「*sujet*」はあくまで「患者」と訳すべきものであり、「普通のことば」を話すなかで、またそれによって自らを「*sujet*」として作り上げる、この「*sujet*」（主体）とは全く別物であると主張できるし、少なくともバンヴェニストはこの二つを重ねることをしていない。しかしフロイト論文の2年後に書かれる主体性論文のなかの「*sujet*」が、やはり「わたしがたり」を始めるときに、そこにはやはりフロイト論文の「*sujet*」の影が見え隠れしていると考えすることはできないだろうか。バンヴェニストが否定すればするほど、フロイト論文で「相手に必死に虚偽の訴えをしている「*sujet*」」は、主体性論文で「相手に語りかけている「*sujet*」」に似てきている。ランボーの「他者としてのわたし」もまた、「ことばにおける主体性」が作りあげる「主体」と無関係ではありえないのである。

6. 結びに代えて

冒頭にひいたヤコブソンは、指標的象徴 (indexical symbol) を説明するなかで、イエスベルセン、パークス、フッサール、ビューラー、ラッセルなどを矢継ぎ早に引いて、論拠を固めている。そのヤコブソンがバンヴェニストを引くのは、次の箇所である。

On the other hand, the sign *I* cannot represent its object without “being in existential relation” with this object: the word *I* designating the utterer is existentially related to his utterance and hence functions as an index (see Benveniste 1956)⁽⁴¹⁾.

他方、*I* という記号はその対象と“実存的関係に”あるのでなければ、この対象を表すことはできない。発話者を示す *I* という単語は、その

(41) Jakobson 1957 [1995], p. 388.

発話と実存的に関係しており、したがって、指標として機能する。
 (Benveniste 1956参照 [“La nature des pronoms”, *For Roman Jakobson* (The Hague, 1956)])

バンヴェニストの人称代名詞の記述は、発話の「わたし」と発話者の「わたし」を実存的に結びつける、という訳である。しかしこの結びつきは、果たして「実存的」といえるまでになっているのだろうか。言い換えれば、ここに「実存」と呼べるの存在が現れているのだろうか。

私たちがこの論考で中心として取り上げた文章 (I) は、次のように続く。

(I) C'est dans et par le langage que l'homme se constitue comme *sujet*; parce que le langage seul fonde en réalité, dans sa réalité qui est celle de l'être, le concept d'« ego »⁽⁴²⁾.

ひとが自らを主体となるのは、ことばのなかで、またそれによってである。なぜならことばのみが現実、それが存在の現実であるところのことばの現実のなかに、「我」の概念を基礎づけるからである。

ことばの現実、イコール存在の現実とされている。しかし「発話行為は消えていく出来事である」(PLG2, p. 227)と後年バンヴェニストが明言するように、ことばの行使は毎回毎回、一回きりのもので、ある時間を持つとはいえ、瞬間的である。それでは「わたし」という現象は、ことばとともに、せわしく明滅する電燈のようにしか現れないものなのだろうか。ここで言われている「ことばの現実」、「存在の現実」とは、どのような「現実」のことなのか。

(42) PLG1, p. 259 (244頁)。

こうした問いに答えるためには、バンヴェニストの異なる問題圏を集約させて論じる必要があり、更なる紙幅が必要となるだろう。私たちの次の課題は、この「存在の現実」の問題を、バンヴェニストが「冒涇語と婉曲語」を考察する際に残した謎めいたメモに紐付けることができるのかを問うことにある。

(XVIII) Le nom de Dieu ne doit pas passer par la bouche, car l'acte de prononcer imprime une trace dans le monde, et le nom c'est l'être. Le nom de Dieu est l'être de Dieu. C'est la lettre de son nom qui fait son existence⁽⁴³⁾.

神の名は口にのぼってはならない、なぜなら発話する行為はこの世に痕跡を刻みつけるからであり、そして名とは存在であるからだ。神の名は神の存在である。かの名の文字が、かの存在を作る。

ここで、神の名という特別な名詞が考察の対象となっているとはいえ、バンヴェニストははっきりと「発話する行為はこの世に痕跡を刻みつける」「名とは存在である」と断言している。ユダヤ神秘主義にも通じるようなこの言葉は、私たちが上に見てきた文章群とどのように関わり合うのか。これまで公にされてきたバンヴェニストの論理的な思考の裏側に顔を出す、異質な思考に向き合うことが今、求められている。

REFERENCES

BENVENISTE Émile

- 1939 « Nature des signes linguistiques », *Acta linguistica*, I (1939) [repris dans Benveniste 1966, pp. 49-55].
- 1947 « Structure des relations de personnes dans le verbe », *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris*, 43 (1946), fasc.1 (n°126), pp. 1-12 [repris dans Benveniste 1966, pp. 225-226].
- 1949 « Le système sublogique des prépositions en latin », Extrait des

(43) f°33, PAP. OR. 52.

- « Travaux du Cercle linguistique de Copenhague », vol.V (1946),
Recherches structurales [repris dans Benveniste 1966, pp. 132-139].
- 1950 « Actif et moyen dans le verbe », *Journal de Psychologie*, janv.-fév.(1950)
 [repris dans Benveniste 1966, pp. 168-175].
- 1956a « La nature des pronoms », *For Roman Jakobson*, Mouton & Co., The
 Hague [repris dans Benveniste 1966, pp. 251-257].
- 1956b « Remarques sur la fonction du langage dans la découverte freudienne »,
La Psychanalyse, [repris dans Benveniste 1966, pp. 75-87].
- 1958 « De la subjectivité dans le langage », *Journal de Psychologie*, 55 (1958),
 pp. 257-265 [repris dans Benveniste 1966, p. 258-266].
- 1966 *Problèmes de linguistique générale*, I, Gallimard. [邦訳『一般言語学の諸問
 題』(河本通夫監訳), みすず書房, 1983年]
- 1974 *Problèmes de linguistique générale*, II, Gallimard.
- n. d. Manuscrits de Benveniste, Fond Émile Benveniste. Bibliothèque Nationale
 de France, Site Richelieu, Section Manuscrits Orientale (PAP. OR).

DESSONS Gérard

- 2006 *Émile Benveniste, l'invention du discours*, Éditions IN PRESS.

JAKOBSON Roman

- 1957 "Shifters, Verbal Categories and the Russian Verb", Russian Language
 Project, Department of Slavic Languages and Literatures, Harvard
 University, 1957, now in Jakobson 1995, pp. 386-392.
- 1995 *On Language*, Cambridge (Mass.), Harvard University Press.

LACAN Jacques

- 1948 « L'Agressivité en psychanalyse », Conférence prononcée à Bruxelles en
 mai 1948 au 11^e Congrès des psychanalystes de langue française, publiée
 dans la *Revue française de Psychanalyse*, juillet-septembre 1948, tome XII,
 n^o 2, pp. 367-388. [repris dans Lacan 1966, pp. 101-124].
- 1953 « Fonction et champs de la parole et du langage en psychanalyse »,
 Rapport du Congrès de Rome (1953), publié dans *La Psychanalyse*, I
 (1956). [repris dans Lacan 1966, pp. 237-322].
- 1966 *Écrits*, Éditions de Seuil.

LALANDE André

- 1926 *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, Presse Universitaire
 de France, 1976 (12^e édition).

LAPLANTINE Chloé, Pierre-Yves TESTENOIRE, Émile BENVENISTE et Roman JAKOBSON

2021 « La correspondance d'Émile Benveniste et Roman Jakobson (1947-1968) », *Histoire Épistémologie Langage*, 43-2, pp. 139-168.

LYONS, John

1984 « La subjectivité dans le langage et dans les langues », in *E. Benveniste aujourd'hui*, tome 2 (éd. Jean Taillardat, Gilbert Lazard, Guy Serbat), Éditions Peeters, pp. 131-139.

ONO Aya

2018 « Prépositions, verbes pronominaux et voix moyenne. Un nouveau point de vue sur la subjectivité langagière d'E. Benveniste », *Blityri*, VII-2 (2018), pp. 39-58.

ROUDINESCO Elisabeth

1992 *Jacques Lacan*, Fayard.

SARTRE Jean-Paul

1937 « La transcendance de l'égo », *Recherches philosophiques*, t. VI (1937), pp. 85-123. [邦訳：『自我の超越 情動論粗描』（竹内芳郎訳），人文書院，2000年]

1940 *L'imaginaire : psychologie phénoménologique de l'imagination*, Gallimard.

邦文文献：

小野 文

2022 「バンヴェニストにおける中動態」, 小野 文・糸田 文編『言語の中動態, 思考の中動態』, 水声社, 2022年。